

連載コラム



第23回
イグサとスゲ



もとよし ふさお
本吉 總男

2016年5月

イグサの仲間(イグサ科)には、いろいろな種がありますが、みずき野周辺に見られたものは、後述する3種です。

スゲの仲間はカヤツリグサ科に属する一群で、日本全土には多くの種が分布していますが、国内各地に存在する普通種を除き、生息地が地域的に限られるものが多いようです。ここでは、みずき野周辺で見られた9種について述べます。

すでに述べたスゲ以外のカヤツリグサ科やイネ科植物と同様、イグサもスゲも風媒花をつける植物で、それらの花は多くの虫媒花に見られるような美しい花弁をもたず、あまり人目に付きません。しかし、花は美しくなくても、その姿には独特の個性があり、魅力的なものも少なくありません。

1 イグサの仲間

(1) イグサ

イグサ(藺草)の別名はイ(藺)ですが、昔、イグサの髓を灯芯として利用したので、トウシグサとも呼ばれます。イグサは湿地や田のへりなどに普通に見られる多年草で、6~9月に花をつけます。日本全土のほか東アジア温帯に分布しています。茎は高さ30~50センチ内外、葉は退化して、茎の根元に短く鞘状さやじょうになってついています。茎は短い地下茎で増えます。花は一見茎の途中についているように見えますが、花より上の部分ほうようは茎ではなくて苞葉(葉の変形したもの)です。



イグサ 6月中旬 貝塚地区

花はイネ科やカヤツリグサ科の植物よりも、通常の花に近い形ですが、花弁がくや萼かひに相当する部分(花被)は淡黄色で小さく、ほとんど目立ちません。

イグサは古代からよく知られ、イグサを編んだ敷物が古墳から出土した例もあり、また奈良時代以来、イグサのいろいろな織物が残されているそうです。ただしイグサの栽培がいつ頃始まったかについては特定できないようです。

畳表に使うイグサは、野生のイグサに由来する栽培品種で、水田で栽培し、高さは100～150センチに生長します。植物学上ではコヒゲと命名されていますが、一般にはこれもイグサと呼ばれています。イグサの栽培は古くは岡山県でもっとも盛んでしたが、現在は熊本県でもっとも多く栽培されているようです。

(2) クサイ

クサイ(草藺)はイグサ(藺草)を逆さにしたような名ですが、イネ科の葉に似たような葉をもつことから、イグサより草らしく見えるので、このような名がついたようです。高さは30～60センチ。花は6～7月に見られます。葉は茎の基部近くから生えます。花は茎の頂端に群がって咲き、花の群れの下には数片の苞葉がつきます。この苞葉は通常の葉に似ており、茎に似たイグサの苞葉とは異なります。



クサイ 7月上旬 さくらの杜公園

クサイはいたるところに生えるもっとも普通の多年草で、みずき野町内にも道ばたや空地にたくさん生えています。日本のほか、アジア、ヨーロッパ、南米、北米、オーストラリアに広く分布しています。

(3) スズメノヤリ

スズメノヤリは、野原や土手などに生えるごく普通の多年草で、日本を含む東アジアの温帯に分布しています。茎の高さが20センチ前後の小さな植物で、花は茎の頂端に通常1つつき、4～5月頃開花します。



スズメノヤリ 4月上旬 本町地区

植物には、それぞれの花の雌しべが同じ花の雄しべからの花粉を受けて受精(自家受精)する種もかなりありますが、多くの種でなるべく自家受精を避ける工夫をしています。例えば雌株と雄株とに分かれていたり(雌雄異株)、同じ株に雄花と雌花を別々につけたり(雌雄同株)、また正常な雌しべと雄しべをもつ花(両性花)でも、雄しべと雌しべの成熟時期をずらして(雌雄異熟)自家受精を防ぎます。自家受精を防ぐ目的は、他の個体との交雑によって、個体の集団の中で、互いに遺伝子を交換し合い、生存に有利な遺伝子が組み合わさった子孫を作ること、他の植物との生存競争に負けないようにするためです。

スズメノヤリの花は両性花ですが、雌雄異熟によって自家受精を防いでいます。開花すると、雌しべが雄しべより先に成熟します(雌性先熟)。成熟した雌しべは、他の花から風に乗って飛んでくる花粉を受けて受精します。受精を果たした後、雄しべが成熟し、別の株の花を受精させるため、花粉を風に乗せて飛ばします。



スズメノヤリの花(左:雌期 右:雄期) いずれも4月中旬 第2調整池

この植物は、大名行列のときやっこ奴が振る毛槍の形に似ているので、スズメノヤリ(雀の槍)と命名されたということです。スズメとは、スズメノカタビラ、スズメノテッポウなどと同様、おそらく「小さい」という意味で付けられたもの、つまり「小さい毛槍」という意味と思われますが、私はスズメを大名行列のやっこ奴に見立てて、スズメやっこ奴がチュンチュクいいながら、毛槍を振っている姿をイメージしています。

2 スゲの仲間

前述のように、スゲはカヤツリクサ科に属する大きな一群ですが、一般のカヤツリクサとは少し趣が異なっています。スゲでは、1本の茎に花の塊が1つまたは複数つきます。植物学では、このような花の塊をしょうすい小穂と呼びます。

(1) アゼスゲ

湿地にごく普通の多年草のアゼスゲは、北海道、本州、四国、九州や千島、サハリンに分布しています。茎の高さは20～70センチ、頂端に1～2本の雄花の小穂、その下に2～3本の雌花の小穂しょうすいがつきます。花は4月末から5月に咲き、花期には黄褐色の雄しべ、白い雌しべが、むしろ金色、銀色にも見え、美しい小景をつくり出します。みずき野では第2調整池にたくさん見られます。



アゼスゲ 4月下旬 第2調整池



アゼスゲの雌花と雄花の位置

(2) アゼナルコ

アゼナルコもまた湿地にごく普通に見られる多年草で、北海道を除く日本列島と東アジアおよび東南アジアの温帯から熱帯まで分布しています。茎の高さは40～70センチ位。茎から4～5本の小穂しょうすいが垂れ下がります。花は5～6月頃。みずき野周辺でも多く見られ、第2調整池にもたくさん生えています。



アゼナルコ 5月下旬 本町地区



アゼナルコの雌花と雄花の位置

一番上の小穂^{しょうすい}は、雄花につく部分と雌花がつく部分に分かれています。他の小穂^{しょうすい}はすべて雌花をつけます。アゼナルコ(畦鳴子)の名は、小穂^{しょうすい}の垂れ下がっている様子を、鳥を追い払うための鳴子^{なるこ}に見立てたものでしょう。

(3) ヒゴクサ

林の中に多い多年草のヒゴクサは、南西諸島を除く日本全土と朝鮮半島、および中国に分布しています。茎の高さは20～40センチ位。小穂^{しょうすい}は2～4本で、茎の頂端の細い小穂^{しょうすい}は雄花、下の小穂^{しょうすい}はすべて雌花を付けます。花は4～6月に咲きます。



ヒゴクサ 5月上旬
第2調整池北隣接地

(4) マスクサ



マスクサ 5月下旬 第2調整池北隣接地

マスクサは、ヒゴクサと同じように林の中に普通に生える多年草です。茎の高さは30～70センチ。北海道と南西諸島を除く日本列島と、朝鮮半島や中国に分布しています。小穂^{しょうすい}はすべて雌花と雄花を持っていますが、雄花は小穂^{しょうすい}の基部にごく少数ついているだけで、あとはすべて雌花です。花は5～7月に咲きます。

(5) ミコシガヤ

湿地に生える多年草のミコシガヤは、本州と東アジアの一部に分布しています。茎の高さは20～60センチ。小穂はすべて雌花と雄花を持っていますが、雄花は小穂の頂端にごく少しあるだけで、他はすべて雌花です。花は5～6月に咲きます。全国的には必ずしも多い植物ではないのですが、みずき野周辺には普通に見られます。



ミコシガヤ 5月下旬 第2調整池

(6) アオスゲ

アオスゲは多年草で、日本全国のほか、東アジアの温帯、亜熱帯に分布しています。日本では、もともと普通に草地に生えているスゲですが、みずき野周辺にはそれほど多くないように思われます。茎の高さは10～30センチ。小穂は2～5本で、頂端の小穂は雄花をつけ、他は雌花をつけます。花期は4～5月です。



アオスゲ 5月上旬 第2調整池

(7) ヤガミスゲ

ヤガミスゲは、北海道、本州、四国、九州のほか、東アジア北部に分布する多年草。草原の湿地や河原に生えます。高さ40～60センチほどの茎に短い小穂が10～20ほどつきます。小穂の基部に少数の雄花をつけ、上部はすべて雌花です。花は5～6月に咲きます。



ヤガミスゲ 6月上旬
3丁目東隣接地

(8) ナキリスゲ

多くのスゲは春から初夏に花をつけますが、ナキリスゲは珍しく、秋に花を咲かせる多年草です。花期は9～11月。本州、四国、九州のほか、東アジアの一部に分布しています。茎は叢生(一株に複数の茎が生えること)し、1本の茎は枝分かれますが、小穂は茎全体に10数本つきます。小穂の先端に雄花がつき、下はすべて雌花です。

日本ではごく普通に生え、みずき野では文化財公園に多く見られます。



ナキリスゲ 11月中旬 貝塚地区

(9) カサスゲ



カサスゲ 4月下旬 第2調整池北隣接地

菅笠すげがさの材料として知られるカサスゲは、スゲの中では大型で、茎の高さは40～100センチ。太い地下茎を伸ばして群生する多年草です。茎の頂端の小穂には雄花がつき、下には数本の雌花を持つ小穂しょうすいがつきます。花期は5～6月。北海道、本州、四国、九州のほか、東アジア北部に分布しています。湿地で普通に見られるスゲで、みずき野周辺にも休耕田にたくさん生える場所がありましたが、最近では休耕田が水田に復帰することが多く、カサスゲもあまり見られないようになりました。



古事記が書かれた時代には、菅をスガとよんでいたようです。神武天皇が、のちに皇后となった女性の家を初めて訪ねたときの様子を次のように歌っています。

菅原の ^{を や} しけしき小屋に ^{すがたたみ} 菅 畳 いやさや敷きて わが二人寝し

(葦原にある汚い小屋に菅たたみを清らかに敷いて二人で寝たのだったな)

多分、菅畳はカサスゲを編んだ敷物であろうと思います。その後、カサスゲの葉は、^{すげがさ} 菅笠や ^{みの} 蓑の材料として使われました。^{すげがさ} 菅笠は万葉集にも登場します。

^{おうきみ} 王君の ^{みかさ} 御笠に縫へる ^{ありますげ} 有馬菅 ^{わぎも} ありつつ見れど 事なき我妹

作者不詳(万葉集2757)

(解釈が難しい歌ですが、「天皇の御笠に編む有馬の菅のように、ずっと長く見続けているわが妻は見れば見るほど好ましい」というような事でしょうか)

^{はしだて} 梯立の 倉橋川の 川のしづ管 わが刈りて
笠にも編まぬ 川のしづ管

柿本人麻呂(万葉集1284)

(歌の形式は^{せとうか} 旋頭歌(5・7・7・5・7・7 から成る形式)。「倉橋川のしづ管を刈ったけれど、笠にも編まなかった」。「しづ管」は「小さい管」の意でしょうか。あの「しづ管」のような人を妻にする(笠に編む)ことができなかったということらしい)

^{すげがさ} 菅笠は江戸時代までずっと使われてきました。^{すげがさ} 菅笠は今でも伝統工芸品として作られ、時代劇や祭りの被り物として使われています。